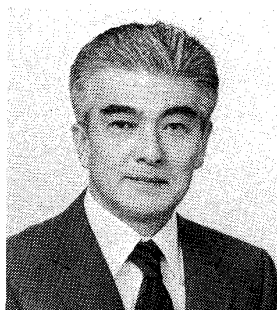


野 呂 賞

川鉄テクノロジー(株)総合検査・
分析センター総括技術室部長

針間矢 宣 一 君

鉄鋼関係分析方法の標準化に関する貢献



君は、昭和 25 年 3 月兵庫
県立工業専門学校工業化学科
を卒業、26 年 3 月川崎製鉄
(株)に入社、葦合工場分析課
勤務を経て、43 年 11 月技
術研究所分析研究室主任研究
員、49 年 4 月同室長、分析
物性研究部副部長を歴任、60
年 3 月川鉄テクノロジー
(株)に出向、現在に至ってい

る。

この間、一貫して鉄鋼及び原材料に関する化学分析法
の研究に従事すると共に、本会の標準化活動に貢献し、
以下の業績を挙げた。

共同研究会鉄鋼化学分析分科会委員として 42 年 2 月
より参画しているが、特に分科会主査(55 年 8 月～61
年 12 月)として、鉄及び鋼、鉄鉱石の化学分析法及び
原子吸光分析法の JIS 改正には、規格の新様式、適用範
囲の決定方法など規格の国際化、鋼材品質の向上に適合
した内容の充実をはかり、鉄鋼分析技術の向上に大いに
貢献した。

また鉄鋼代表として JISC 化学分析部会及び鉄鋼部会
の各専門委員会に推薦され、臨時委員として化学分析法
の各種通則、各種標準液、各種フェロアロイ分析方法、
マンガン鉱石およびクロム鉱石など 160 余の規格制定
に関与するなど、本会を足場に JIS の普及に貢献した。

国際標準化活動としては ISO/TC17/SC1 分科会委員
(49 年～59 年)を務め、SC1 ダブリン会議(51 年 4
月)に日本代表として参画、ニッケル定量方法の原案作
成者として活躍、さらに SC1 東京会議(57 年 5 月)の
実行委員を務め日本代表として尽力した。

本会鉄鋼標準試料委員会委員(49 年 4 月～現在)とし
て、分析技術の向上と標準化に不可欠な鉄鋼標準試料の
製造及び調製技術の向上に務め、“日本鉄鋼標準試料の
製造から利用まで”及び“日本鉄鋼標準試料の製造に関
する技術報告書”の編集及び執筆に関与すると共に、講
習会の講師を勤めるなど、JSS の信頼性向上と普及に多
大の貢献を行った。

また、鉄鋼中微量成分分析に関する多数の報文を“鉄
と鋼”誌に発表し、その業績に対して、昭和 55 年西山
記念賞を授与されている。

さらに本会編集委員(51 年 9 月～55 年 8 月)を務め
ると共に“第 3 版鉄鋼便覧第 4 巻”及び“日本鉄鋼業に
おける分析技術”の編集及び執筆にも関与した。

野 呂 賞

(株)日本製鋼所取締役技監

渡 辺 十 郎 君

圧力容器用・原子力用鋼材の開発に関する貢献



君は昭和 24 年 3 月北海道
大学工学部機械学科を卒業
後、株式会社日本製鋼所に入
社、室蘭製作所に勤務、昭和
46 年 2 月検査部長、昭和 48
年 2 月研究所長を歴任した。
その間昭和 40 年から 45 年
までニューヨーク駐在員を勤
務している。昭和 55 年 1 月
より東京に移り、同社開発技

術本部副本部長となり、昭和 58 年 6 月取締役選任さ
れた。昭和 62 年 1 月より取締役、技監となつている。

君は昭和 57 年 4 月より 59 年 4 月まで本会理事とし
て、本会事業の推進に貢献した。また本会が幹事学会と
なっている日本圧力容器研究会(JPVRC)が昭和 52
年に設立されて以来、材料部会副会長としてその育成
に尽力している。特に君は昭和 53 年以降、年 3 回定期
的に開催される PVRC (USA) の会議に JPVRC 代表
として毎回出席し、JPVRC の研究成果を発表するとと
もに、日米技術の交流に顕著な功績があつた。また、昭
和 50 年には本会の欧米研究視察団の団員として派遣さ
れている。

君は大型圧力容器鋼や原子力発電用大型軸材の製造、
検査、品質保証や安全解析の研究開発に長年にわたつて
従事し、日本の鉄鋼業界がこの分野で世界をリードする
地歩を築くのに多大の寄与をした。昭和 59 年サンフラン
シスコで開催された第 5 回圧力容器技術国際会議では
特別講演で日本での圧力容器製造技術を紹介した。この
講演は 2 1/4Cr-1Mo 鋼製高温、高压容器を主な対象と
し、焼もどし脆化、オーステナイト系ステンレス鋼の水
素脆化、クリープ脆化やステンレスオーバーレイのはく離
問題など広範囲な技術的課題とその解釈法を示した。

君は約 40 年の間、一貫して鉄鋼材料の強度問題の研
究を専門とし、協会のクリープ委員会や高温強度部会な
どで積極的に活動した。現在もなお研究活動を続けてお
り、約 100 篇の論文を本会会誌や関連の和文、欧文学
会誌に発表している。